

## 最近、気になることから



学習院大学・東京家政大学・聖徳大学 非常勤講師 辻 政博



写真1 路上のらくがき。少子化の現在では、ほとんど見なくなったが、こうした子どもの痕跡を見るとホッとする。

### 1、はじめに

本務の大学を退職して2年になる。現在は、いくつかの大学や大学院で非常勤



写真2 (左)、写真3 (右) すでに「空き地」は存在しない。公園もさまざまな禁止事項で溢れている。

をしたり、現場の授業研究会へ講師で出かけたりすることが多い。大学では、教職課程等の科目や、また教職課程としてではなく美術を専門とする学生が子どもを対象とした造形活動へと視野を広げる授業にも参加している。

このような執筆の機会をいただいたので、美術教育や子どもをめぐる「気になることに」について、身の回りの事象を基に考えてみたい。

## 2、散歩から

最近、少し時間もでき、よく散歩をする。散歩は、身体の移動とともにあり、固定されない情景がどんどん展開していく。「考える」というと、椅子に座った静止した姿勢や時間を思い浮かべるが、移動する身体は、むしろ、もうひとつの思考する時間でもある。

東京の都市は、際限なく無秩序にどこまでも広がっていく空間で、その複雑に区割りされた住宅街を歩いていくと、実に静かなことに気づく。そこには、活気のある「ノイズ」がない。つまり、子どもの声がしないのだ。

最近の報道で、「子どもが騒がしい」と公園が廃止になったニュースが世間を賑わせたことがあった。<sup>1</sup> これは保育園の新設などでもよく聞く話だが、社会が、子どもをどう捉えるかで、子どもへの対応は変化してくる。

日本の人口動態の推移は、2050年には、約9,500万人、2100年には5,000万人前後となり、「日本の総人口は、2004年をピークに、今後100年間で100年前(明治時代後半)の水準に戻っていく可能性。この変化は千年単位でも類を

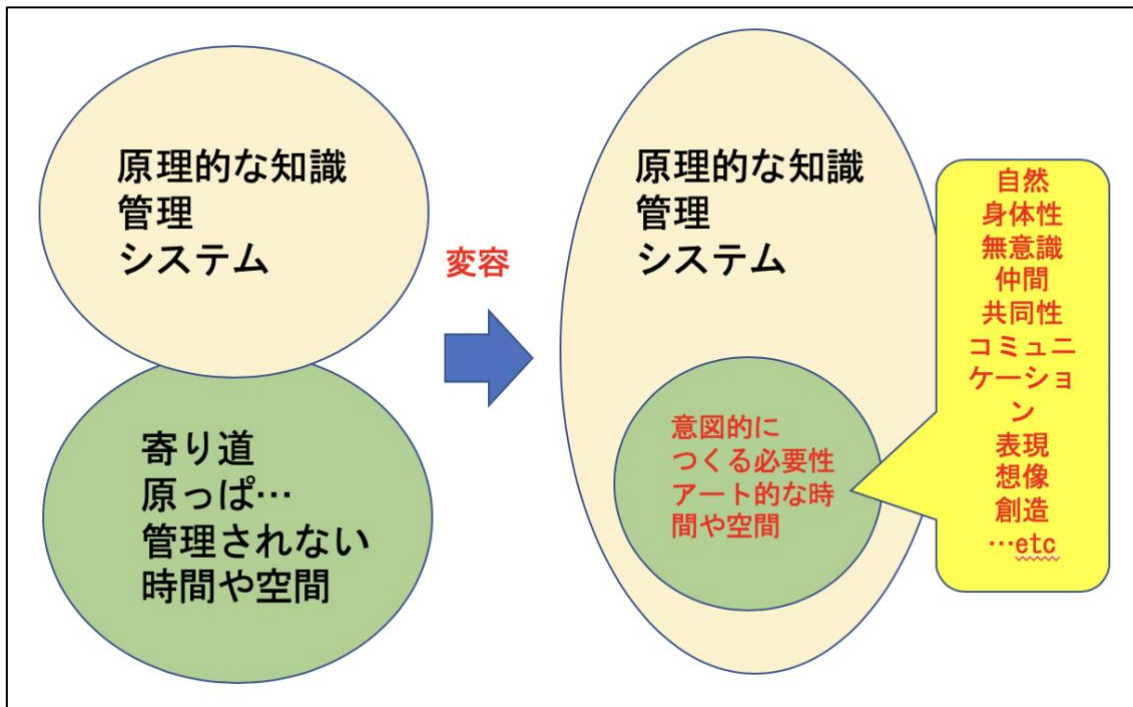


図1 すでに「空き地」は存在しない。公園もさまざまな禁止事項で溢れている。かつて学校は「原理」を教え「放課後」は子どもたちの自由な時間だった。そこには「寄り道」の時間があったのだ。現在は、原理的なシステムが生活を覆い尽くしていると考えれば、子どもが、自然や共同性などに浸る場は、意図的に設置されなければならない。(図は、筆者作成)

見ない、極めて急激な減少」であることが指摘されている。<sup>2</sup>

私が子どもだった頃（昭和20年代後半～昭和30年代）は、まだ「空き地」や雑木林が散在していた。学校のカリキュラムもギュギュウ詰めではなく、「放課後」の時間もたっぷりあったように記憶している。帰り道は、友だちと寄り道をしながらぷらぷらと帰ることが多かった。家に直行してもランドセルを放り出し、遊びに出かけた。年上や年下の子どもがどこかにいて合流し、秘密基地をつくったり、木登りをしたり、虫を獲ったりした。こうした「子どもの時間」が、自分の中核をかたちづくっていると感じている。

文明の発展期には、うごめく子どもたちの姿がみられるものだが、『ドラえもん』の「空き地」の世界はすでになく、現代の子どもたちは「GPS」をランドセルに仕込んで、個々に分断された生活をしている。





写真4 明治時代の「臨画」。近代化の過程で生まれた図画の教本。お手本を模倣していく指導法。西洋近代を移入する過程で、「模倣」は必然であったのだろう。

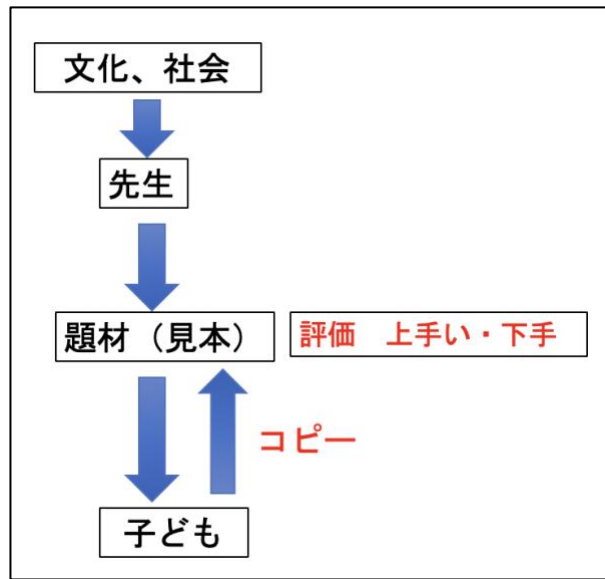


図2 現代でも、教師は「教える」構造の中でモデルを提示し、子どもはそのコピーを要求される。一義的な単線系の指導モデルと言える。（図は、筆者作成）

### 3、現代も「臨画」の時代？

時々、児童画の審査会に呼ばれる。一次審査となると、山積みの子どもの絵の前に立たされる。その時は、幼児の担当だった。「麒麟の絵」が一番上に置かれていた。

年長さんのもので、左を向いた麒麟は大きく描かれ、足や首も長く、胴体とのバランスもしっかりしていて、おまけに、その背中には、作者であろう子どもが楽しそうに乗っている。一見、その絵は年長としては、十分に見事な技巧であると思われた。

けれども、その絵をめくると、全く同じものが出現した。次の絵も、さらに次の絵も……ひとクラス分が同じであった。

「なぜ、右向きの麒麟は、いないのか？」「なぜ、小さい麒麟はいないのか？」「なぜ、首の短い麒麟はいないのか？」「なぜ、みな背中に乗っているのか？」「なぜ、ピンクの麒麟はいないのか？」「なぜ、画用紙は縦向きなのか？」

個々の子どもの思いや発想・工夫は、そこには、あまり見当たらず、教師のよいと考えた題材モデルのコピーがそこにあるばかりだった。

さらに、キリンだけでなく、「牛」「へび」「鳥」「タケノコ」などなど、マニュアルのバリエーションが展開していくのであった。

にこりと笑った笑顔さえ、同じ画像が並ぶとなると、本来の個々の子どもの感情とは遊離した大人の望むべき「子ども像」の捏造さえうかがえた。（※誤解されないように注記するが、これは表現者としての子どもの批判を含んでいない。あくまで指導の方法論への言及である。子どもは健気で従順でさえある。）

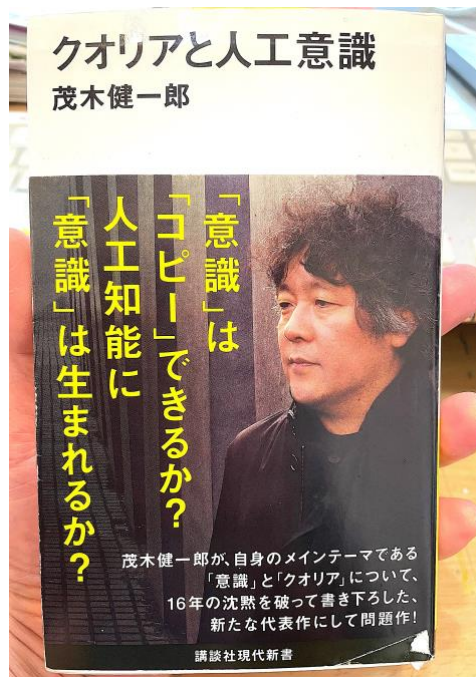


写真5 茂木健一郎著『クオリアと人工意識』講談社、2020年より

こうした点に関して、脳科学者の茂木健一郎は、美術教育の関係者にとって、耳の痛くなるような強烈な批判を「You-Tube」で展開している。<sup>3</sup>

「日本の図画工作、美術教育をなんとかしよう」『茂木健一郎の脳の教養チャンネル』 <https://www.youtube.com/watch?v=rpfdNR2j00s>

こうした社会的に影響力をもつインフルエンサーによる批判は、美術教育関係者の外部からの視点を示しているが、むしろ、謙虚に受け止めつつ、美術教育の実態を踏まえ、その長所と短所を模索した方がよいと思う。言い方を変えれば、美術教育自体は、社会や教育総体の中では、ニッチ（隙間）な分野、産業であることを自覚しつつ、その中でできうることを、子どもを中心に据えて考えることで貴重な問題を提起できるのではないか。

現行の『学習指導要領』（平成29年告示）では、「資質・能力」論が基調となつて構造化されているのは周知のことだと思う。ここでは、「Contents-based」から「Competency-based」への明快な志向がみられる。（図3、図4、図5）

今後の「予測不能な世界」に対して、知識を社会的に活用する能力、汎用的な能力が求められているのは、当然の成り行きとも考えられる。

けれども一方で、先ほどのコンクールの「麒麟の絵」のような、特定の絵の描き方（内容）を目的とした「Contents-based」の傾向の指導が、現場で流布していることも事実である。このことは、今後の教員養成や教師の研究、研修のあり方に関わる問題を示している。

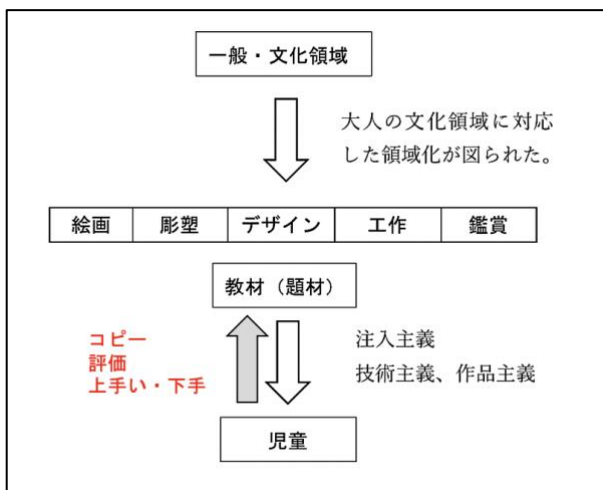


図3 昭和43年告示の学習指導要領における領域区分では「Contents-based」の志向がみられる。(図の作成は筆者による)

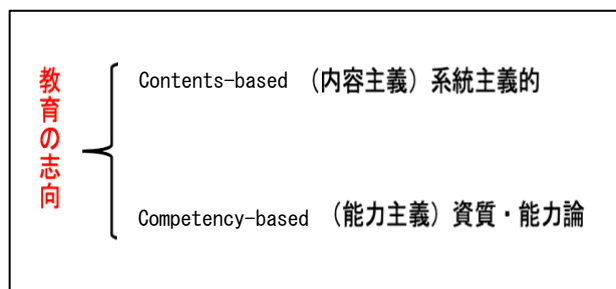


図4 現行の学習指導要領では、はっきりと「Competency-based」への思考が認められ、資質・能力論への傾斜がみられる。(図の作成は筆者による)

図5 (出典)OECD “Definition and Selection of Competencies (DeSeCo)” を参考に文部科学省作成。  
[https://www.mext.go.jp/content/1377021\\_4\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1377021_4_2.pdf)

### OECDキーコンピテンシーについて

OECDにおいて、単なる知識や技能ではなく、人が特定の状況の中で技能や態度を含む心理社会的な資源を引き出し、動員して、より複雑な需要に応じる能力とされる概念。

【キー・コンピテンシーの3つのカテゴリー】

- 1. 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力**
  - A 言語、シンボル、テキストを相互作用的に活用する能力
  - B 知識や情報を相互作用的に活用する能力
  - C テクノロジーを相互作用的に活用する能力
- 2. 多様な社会グループにおける人間関係形成能力**
  - A 他人と円滑に人間関係を構築する能力
  - B 協調する能力
  - C 利害の対立を御し、解決する能力
- 3. 自律的に行動する能力**
  - A 大局的に行動する能力
  - B 人生設計や個人の計画を作り実行する能力
  - C 権利、利害、責任、限界、ニーズを表明する能力

○ この3つのキー・コンピテンシーの枠組みの中心にあるのは、個人が深く考え、行動することの必要性。深く考えることには、目の状況に対して特定の定式や方法を反復継続的に当てはめることができる力だけではなく、変化に対応する力、経験から学ぶ力、批判的な立場で考え、行動する力が含まれる。

(出典) OECD “Definition and Selection of Competencies (DeSeCo)” を参考に文部科学省作成  
166

#### 4、現場の研究会から

ここ2年、東京都の市部や23区内の各地区の図工研究会や東京都図画工作研究会（以下「都図研」と略する）へ参加する機会が増えた。私がかつて所属していた頃とは、すっかり人員構成も変わり、若い先生ばかりである。また、当時は、新人だった先生方が、研究会の活動を牽引する中心メンバーとなっている。

「都図研」は、専科教員が配置される日本でも稀有な教科研究会である。<sup>4</sup> 約1,200校の図工専科が所属し、研究・研修を行う。授業研究が主流であり、題材の開発や指導法の研究を行っている。そして何よりもそこには、生身の子どもが存在し、その中で教科の問題を探り続けているところに特徴がある。

通常は、授業研究会に呼ばれることがほとんどだが、先日、都図研の役員が集まる事務局会でこれまでの「都図研の歴史や流れ」について話してほしいという要請があり出向いた。

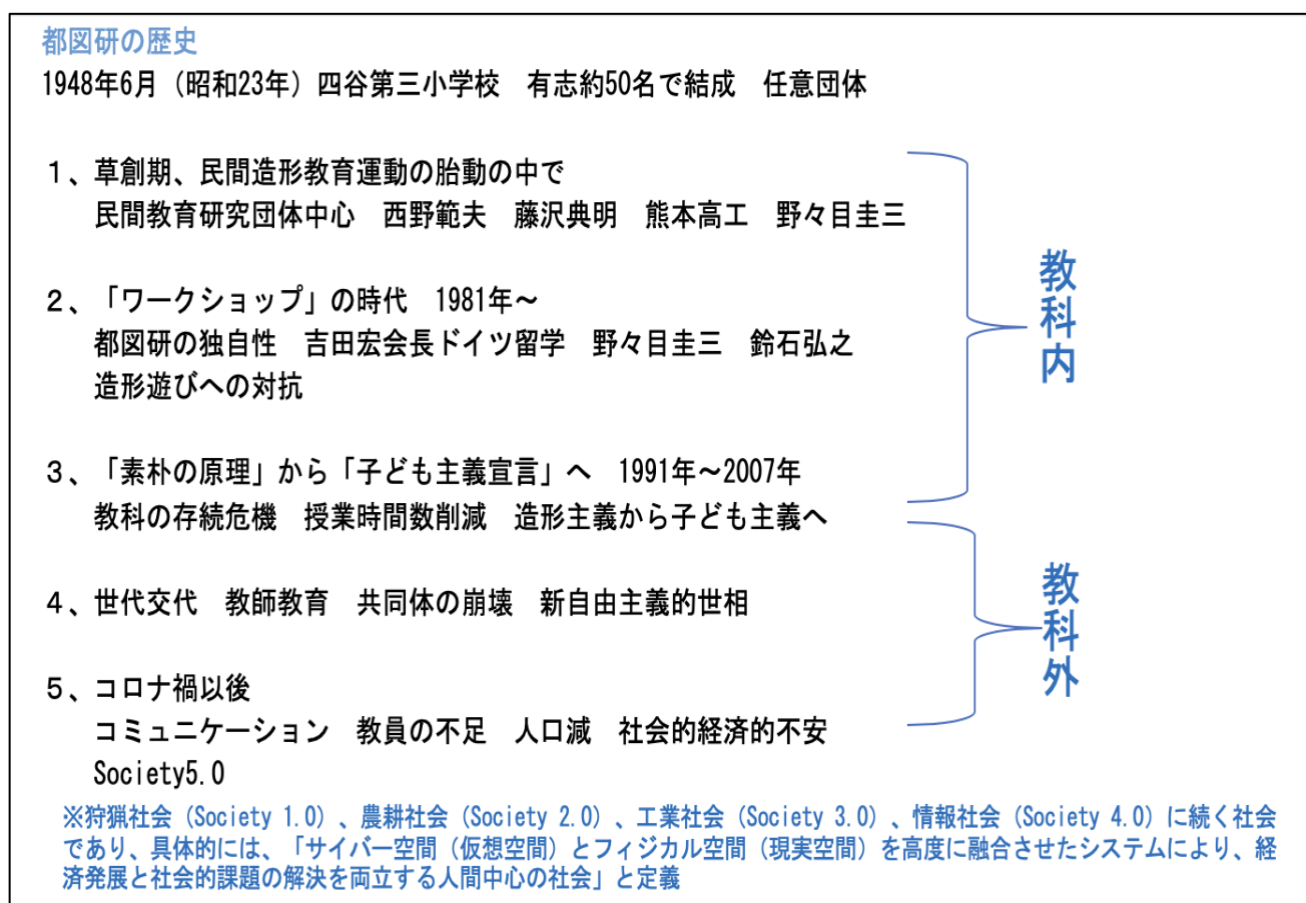


図6 都図研の歴史 5つの画期に分けて考えてみた。（筆者作成）



### 都図研関連出版本

1981年『素材に出会った子供たち - これからの図工教育をめざして ワークショップ』文化書房博文社（城西大会）

1986年『子どもの美の領土へ 新しい鑑賞授業の実践』都図研鑑賞研究会

1990年『素朴の原理 ~子どもの表現のリアリティをめぐる~』東京児童幼画堂 著

1991年『アートスクランブル 子どもたちからの発信』東京都図画工作研究会、文化書房博文社（教科性検討委員会）

1995年『くるくるアート』パルコ出版社（城北大会）

1996年『シーガルあそぼう』セゾン美術館・東京都図画工作研究会著、セゾン美術館

1997年『ものがたりの森』国立西洋美術館、東京国立博物館、東京都図画工作研究会

2003年『教育技術MOOK—造形遊び—』東京都図画工作研究会著、小学館

2007年『子ども主義宣言—子どもたちのリアルと図工の時間—』東京都図画工作研究会著、三晃書房

2007年『月に吠える—子ども・アート・学校—』鈴石弘之と共著、文化書房博文社

2008年『わくわく 図工室にいこう ~こどもがつくるたのしい時間~』美術出版社

2009年『きみはなまいきななみさまだ 谷川俊太郎と子どもたち 子どもの詩の絵本』三晃書房

2012年『わくわく 図工室にいこう2 ~アートが生み出す子どもの未来~』美術出版社

2017年『わくわく 図工室にいこう3 ~自分をつくる 未来をつくる~』美術出版社

図7 都図研関連の出版物（筆者作成）

私の上の団塊の世代は、すでに姿がなく、私のひとつ下の世代は極めて人数が少なく退職期を迎えており、現役世代は、その下の世代となっていて、世代間のギャップが激しくこれまでの歴史的な経緯は、伝わっていないのであった。

図6は、1948年の創立から現在に至る流れを画期に分けて示したものである。中期までは、「教科内」の問題が主であったが、教科改編に伴う存続問題が発生した頃から、「教科外」の外的な要因が、教科のあり方に大きく影響を与えている。また、図7のようにその時代の教育課題に対応した独自の先進的な提案をおこなってきたことが、よくわかる。

このような流れを説明し、以下のような現場研究会とし必要な研究活動として、5つの提案をおこなった。

① 目の前にいる子どもの姿からはじめる→存在の肯定、子どもは有能な存在、形と色、イメージを媒介にした教師と子どもの実存的な関係の重視 etc



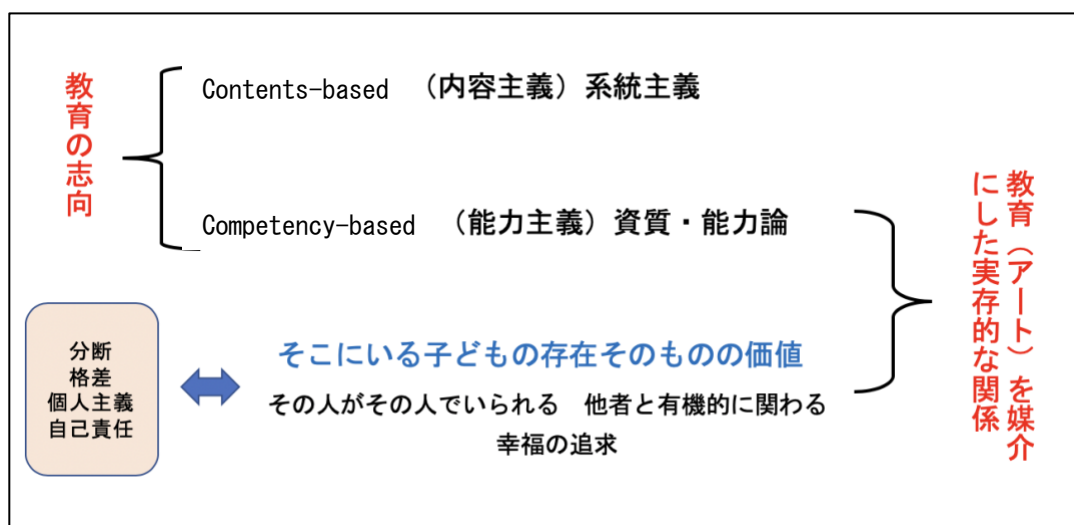


図8 能力主義の向こうへ (筆者作成)

- ② 活動の場の提供と活動の読み取り→新しい、広がりのある知覚や認識を経験できる場、子どもの活動の多様性の意味を掬い取る etc
- ③ 教師の共同性の再構築 (専門性の熟達する場) →現場での研究の必要性和充実をはかる手立て、教師間のネットワーク etc
- ④ コロナ禍以後の社会や時代の変化に対応した指導や題材のあり方や、そこから現れてた造形教育の意味や価値の発見 (再発見) と発信→身体性、関わり (共同性)、多様性、価値の伝達と広報 etc
- ⑤ 応答 (学びの主体性) は、他者 (子ども) の自由の深淵から立ち上がるもの → 教育の難しさ、やりがい、探究の面白さ etc

特に、「教師の共同性の構築」は、現場の教師にとっては、専門性が熟達していくための必要不可欠な場であり、都図研のような現場の研究会の重要な役割でもあろう。コロナ禍も過ぎ、2023年度に立川市で開催された対面の研究大会の実施は、多くの先生方が集まり、熱気を感じさせるものであった。

ここまで述べてきて先ほどの「Competency-based」の能力開発ということばに違和感を感じる自分を発見してしまうのであった。単に「能力」を開発するという以上に、つまり、切り取られた能力ではなく、まずは、子どもの存在そのものを肯定するような深くて温かいまなざしこそが必要ではないか。(図8) このよ

うな問いへの探究は、研究の内容や方法も含めて、今後の大きな課題であろう。

## 5、おわりに（学生のレポートから）

教師という仕事の面白さ、楽しみのひとつに、子どもや学生などの受講者からの刺激、フィードバックがある。そこには、一方的に情報を提供するのではない新たな自分自身の発見がある。

指導法の授業では、他学科からの聴講の学生もいる。Yさんは、哲学科の学生で美学を研究している。ほとんどの学生は、教育学科の学生なので異色ではある。授業中、話しかけてきて、他の科目のレポートに図工のことを書いたので読んでみてくださいと印刷物を渡された。<sup>5</sup>

そこには私が指導法の授業の最初に述べた「アートはメディウムである」というテーゼについての違和感からはじまる感想が述べられていた。

確かに、何かを媒介するメディウムではあるが、そこには飛躍があり、さらに、現代アートが、そのモダニズムによって、媒介性そのものが自立していく過程からみても、もはやアートはそれ自体、メディウムでさえないものとも考えられる。ゆえに、その言い回しには、当初「不足」と「過剰」を感じたという。

けれども、受講するうちに、このテーゼの重要性について、

アートが何かと何かをつなぐものであるというその歴史的な規定は引き継ぎつつ、しかし、そのつながれる二項の同定を遅延させていくこと。これであるように思われる。「アートはメディウムである」という命題に「なんの？」という問いを禁じておくこと。このとき、アートは、製作者と対象、製作者と世界、製作者と鑑賞者、鑑賞者と世界…etc、といった二項（あるいは、そのアートを中心とした集団という多項でもあり得るかもしれない）とを結びうる潜在的媒体として機能し始める。（学生のレポートより）

という見解を示し、さらに続けて

むしろこのことは、図工教育へと差し向けられる。児童はしかじかの素材を通じて自らの感性をはたらかせ、そしてそのことを媒材として、他者や世界へとつながっていくさまざまな可能性を開花させていく。図工のなかで描画方法などを体系的に教えることが極めて少ないのは、メディウムの機能の多様性を可能な限り保持しておくためだ。児童が絵を描く際に、例えば、遠近法などの制度を教えてしまえば、絵の具や紙といった素材とのかかわり方は、どうしても一義的になってしまうだろう。素材を媒質として、みずからの感性には誠実に、自由に制作に取り組んだとき、おのずと世界の捉え方や美の公準は更新され、多様な見方・考え方が児童自身のうちに育っていく。(学生のレポートより)

と述べ、図工教育のあり方にも言及している。

こうした学生の意見は、私にとって惰性化したことばが、それを解する他者の視点によって溶解し、新たな意味として立ち現れた瞬間でもあった。こうした現代アートの状況と美術教育を重ねる視点からの意見は、たいへん新鮮であった。こうした刺激を得られるのは、教師という生業の醍醐味であろう。

美術教育(アート)は、その媒介性を積極的に活かすことで、この冷え切った社会のさまざまな場所に、僅かかもしれないが、豊かで多様性のある結節点を生み出す可能性を秘めていると考えられる。

---

<sup>1</sup> 長野放送局、NHK長野WEB特集「“子どもが騒がしい” 1軒苦情で公園廃止 “存続も選択肢の迷走”」 <https://www.nhk.or.jp/nagano/lreport/article/000/67/> 2024年2月16日参照。

<sup>2</sup> 国土交通省国土計画局、国土審議会政策部会長期展望委員会『「国土の長期展望」 中間とりまとめ 概要』平成23年2月21日。 <https://www.mlit.go.jp/common/000135837.pdf> 2024年2月16日参照。

<sup>3</sup> 茂木健一郎「日本の図画工作、美術教育をなんとかしよう」『茂木健一郎の脳の教養チャンネル』 <https://www.youtube.com/watch?v=rpfdNR2j00s> 2022年8月24日参照。

<sup>4</sup> 詳しくは、美術科教育学会叢書第1号『美術教育学の現在から』美術科教育学会 美術教育学叢書企画編集委員会：永守基樹、水島尚喜、相田隆司、直江俊雄、山木朝彦。執筆：永守基樹、藤江充、藤原智也、奥村高明、岡崎昭夫、新井哲夫、笠原広一、茂木一司、佐藤賢司、神野真吾、山木朝彦、大嶋彰、小野康男、辻政博、宇田秀士。発行：学術研究出版 BookWay、2018年3月を参照されたい。現場の研究はいかに可能かについて、都図研での事例を基に執筆した。

<sup>5</sup> 初等図画工作科指導法を聴講の哲学科の「学生のレポート」より。2024年1月。